

## 10 華岡青洲自筆序

高橋 均

現在まで、華岡青洲自筆の医学書とされてきた書物は、天理図書館所蔵の乳巖治験録のみである。今回取り上げる序という書物は、札幌華岡家所蔵の春林軒塾本の中から、故宗田一氏が新発見されたもので、華岡青洲の提唱した内外合一・活物窮理に関数自筆本である。その発見は朝日新聞の全国版にて大きく取り上げられたものの、その内容は解読されないまま経過してきている。本学会ではその文意を解読し、現代語訳とし、解説を加える。

先有疾醫瘍醫 内外之分矣重内 輕外自古已然然 未有不精乎内而能治 外者也蓋善工者精於 内而知外其精於内 知外者先竭思心而 明方技以致知研技術 以活物而究其理兩相 得而知内外焉於是 始可與言瘍醫矣故 余嘗曰欲救疾病 當精其内外方無古 今唯在致其知此之謂也

序の書き下し文は後記のごとくなる。先に疾醫・瘍醫、内外の分あり。内を重んじ外を輕んずるは古くより自己に然り。未だ内に精ならずして而も能く外を治むる者あらざるなり。蓋し善工なる者は、内に精にして而も外を知る。其れ内に精にして外を知る者は、先に思心を竭し、而して方技を明らかにして以って知を致し、技術を研ぎて以って物を活かす。而して、其の理を究めれば、兩つながら相い得て、而して内外を知る。ここにおいて始めて與に瘍醫を言うべし。故に余嘗つて曰く。疾病を救わんと欲すれば、當に其の内外に精しかるべし。方は古今なく、唯だ其の知を致すに在りと。此をこれ謂うなり。

現代語訳では後記のごとくなる。以前より内科医と外科医という、内外の区別がありました。そのうち、内科を重視し外科を軽く見るというのが、古くから決まった考えでありました。だから、内科に精通せずして、外科の治療ができる者は、いたためしがありません。思うに、優れた医師は、内科に精通して、しかも外科をもわきまえているものです。さように、内科に精通し、しかも外科をわきまえようとすれば、先ず思慮を尽くして、処方

に関わる内科的技法を究明して知識を身につけ、外科的技術を研究して患者の命を救うようにすべきです。かくして、その道理を究めれば、両方面ともうまくゆき、内科・外科ともわきまえられるのです。このようであつて始めて外科医について語ることができるのです。だから私は、「疾病を治療しようとするれば、当然、内科・外科ともに精通すべきであり、治療法は古今に関わりなく、ただ知識を身につけることこそ要がある」と言つてきましたが、それはこのような意味なのです。

—華岡青洲はその医学理論として「内外合一・活物窮理」を提唱し、多くの門人にその書軸を書き与えている。華岡青洲は、「外科ニ志スモノハ先ズ内科ニ精通セザルベカラズ。苟モ之ヲ審カニシテ之ガ治方ヲ施サバ外科ニ於テ間然アルナシ。内外ヲ審査シ始メテ刀ヲ下スベキモノナリ。」「疾病を療せんと欲せば当にその内外に精わしかるべし。方に古今無し。唯その知を致すに在り。」と述べている。このことから、病気を治癒させるには、外科医であつても内科の知識をわきまえていなければ医療はできないと解説しているのである。このことは、医学が

分科してきていることへの批判であり、統合的な医療をなすべきであると自己の理論を展開しているのである。

華岡青洲の提唱した「内外合一」の理論は現代医学にも充分に通ずる含蓄のある言葉である。

(近畿大学医学部附属病院救命救急センター)